

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

松本清張の推理小説『ゼロの焦点』では、一枚の写真が重要な役割を演じている。新婚間もない夫が、結婚前に赴任していた金沢へ出張中に失踪する。妻は偶然ある本にはさんであつた、ふるびた二枚の写真を発見する。そのうちの一枚には、見たこともない風景にひっそりと立つ、みすぼらしい民家が写っている。なんでもない写真だが、しかし自分にかくすようにして大事にもっていた夫の心情にはただならぬものがある。妻はこの写真のイメージを胸に、夫を探索するために金沢に赴く。夫の秘められた過去をさかのぼり、その失踪への道筋をたどる第一歩は、おそらくいまも日本海に面したどこかにひっそりと立つであろうあの家以外にはないからである。こうして物語は一枚の写真を手がかりとする謎解きへと、急展開していく。

写真と推理小説という連想で思い出すのは、今世紀初頭にユジェーヌ・アジェが撮った、古く人影のないパリの街角や室内の写真である。一九三〇年に出版されたアジェの写真集に序文を寄せたカミーユ・レヒトは、これらの写真は「犯行現場を写した警察写真を思い出させる」と記している。

人影のない街角を撮った写真が犯行現場を思わせるというのは、しかしおそらくはアジェの写真にかぎったことではないのではないか。夫がかくしもっていたみすぼらしい家の写真もまた、すくなくとも妻にとつて、そこでおこった秘められたできごとの現場と映ったにちがいない。だからこそ彼女は、そこに刻印された、屋根におかれた石、低い庇、^{ひさし}ちいさな戸、格子縞の窓、柿の木、背後の山といったディテイルに誘われるように、なお未知のできごとの一部始終を語るべく、推理と探索の旅に発つのである。

写真が見せるのは、〈かつて・あった〉できごとである。しかし、それだけではない。写真はそれまでのできごとが、シャツターの一瞬に押し止められた結果でもある。シャツターを切ることは、できごとにそのつどひとつの結末をあたえることである。旅のスナップは、ひとつの目的地からつぎに移動する前に、ひとまずそこでこれまでの行程に終止符を打つふるまいといえる。

写真には、映像の構造として終止符が打たれていくという事実は、たとえば映画とスチール写真をくらべてみればあきらかになる。ロラン・バルトは映画のなかの一場面と、その場面のスチール写真とは、映像の構造が異なるという。映画の

一場面はつぎの場面とつながって流れていくが、スチール写真は、そこで「時間がせき止められてしまう」のだ。

写真が刻印するのは、〈かつて・あった〉のみならず、同時に〈すでに・おわった〉できごとである。ところで犯行現場というものは、そこでなにごとかが〈おこった〉場所である。犯行現場の写真を見ることは、それが刻印するあるできごとの終わりから、そこに写りこんだ細部をたよりに、いまあらためてそこでおこった事件の発端となりゆきを推理するふるまいである。アジェの写真が犯行現場に見えたのも、そもそも写真映像に独特のこの構造によるのだろう。

発端と結末とで区切られたできごととは、アリストテレス以来の伝統にしたがえば「物語」である。カメラとは、現実の持続を物語へと構造化する装置ではないか。写真とは、なお物語の全容は与えられていないにせよ、すくなくとも物語に必須の基本構造だけは与えられたイメージといえるのではないか。

問 傍線部①筆者の論旨に従えば、「人影のない街角を撮った写真が犯行現場を思わせる」のはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えよ。

イ 出来事の発端が映っていないことが、見る人を結末への推理に導くから。

ロ 人影のない空白の場面が、見る人に時間の持続ではなく停止を感じさせるから。

ハ 人影のない街をあえて写真に撮ったカメラマンの意図が、そこには何かがあると思わせるから。

ニ すでに誰も人物がおらず、何かが終わってしまった感じが、見る人をことの始まりへ誘うから。